

吉備国際大学研究紀要
 (社会福祉学部)
 第20号, 99-107, 2010

言語と生物の類似点に関する一考察 2

平見 勇雄

A Study on the similarity between language and creature 2

Isao HIRAMI

Abstract

Creatures have always developed their own appearances and nature to survive in a special way, and languages also have developed their own characteristics and a variety of rules in different ways. There are many exceptions to the rules of each language and it seems very natural considering the ways languages develop.

The aim of this paper is to examine some exceptions from a viewpoint of the parallels between language and creature.

Key words : creature languages variety

キーワード : 生物 言語 多様性

はじめに

平見 (2009) では言語と生物のあり方には類似点があることを指摘したが、前回に引き続き、言語と生物のあり方の似ている少し具体的な例を紹介したい。生物のあり方を比較対象として取り上げたのは、言語を概観するのにそのあり方がヒントを与えてくれると思われるからである。両者の比較をする目的は英語の所有構文に見られる例外を説明するのに有益だと思われるからである。

生物が多種多様で外界の捉え方を初めとする認識の仕方や存在形態もさまざまであるように、言語もそのあり方の可能性がずいぶんと大きい点で両者は似ている。ただしそのあり方はどんな方向性にも進

む可能性があるわけではなく制限は受ける。たとえば生物なら重力の影響を当然受けているため、いくら多様な可能性を秘めているといっても必然的に拘束される場所はある。また言語には人間が物事を認識するあり方が反映されていると考えられるため、いくら多様とはいっても、そのあり方は各言語間で重複する部分も多く、ある言語とある言語で基本的な部分で相応するところが見つからないほどかけ離れたりはしない。これはどんな言語にも名詞や動詞が存在することなどを考えればすぐに納得できるだろう。

今回取り上げる類似点は、言語のある事象に対立する要因がある場合、どちらか一方が優先されることは既に指摘しているが、そういった選択は生物に

も見られる例を紹介する。また認知的な考え方に立てば一つの決まった形式で表わされる表現には互いに共通性がある、共通性を見つけ出すという前提で分析を行うが、その点から説明できないと思われる例が所有構文にはある。しかし逆に表面上は共通性がある場合でもおたがいが共通の要因でそうになっているわけではない例が生物の場合にもある。言語にも生物と同様の原理が働いている部分があると考えられるのであれば、ある表現で表される場合、必ずしも同じ理由（共通性）だけでその形式が使われているわけではないことを指摘したい。

さらに所有構文の形式は対照的な特徴をそれぞれの形が持っているが、両者は相対立していながらも一方がもう一方の代わりになる場合がある。用法的にはまったく矛盾する例であるが、こういった特徴は生物にも見られるのである。それぞれの形式が存在理由を持つ形として存続していくために所有構文は他とは違う性格を備えるようになるが、生物もそれぞれ別もの（いわゆる亜種）として枝分かれしている場合、棲み分けのような性質を持ってそれぞれの領分を持っていること等を見ていくことにしたい。

1 相反する要因の一方が優先される例

英語という言語の、特に所有構文を対象に言語のあり方を検討してきたが、A's B という形で本来表されるはずの表現が B of A の形で表される可能性が高くなる例を前回までに紹介した。たとえば *this car of John という表現は car と John の関係は所有関係にあり、A' B が所有の関係を担当するため、B of A の形式では表わせない。しかし同じ所有関係にあっても A の語が長い場合 (this car of the people who live next door) は英語に浸透している end-weight の特徴が作用して、意味と形式の関係を破る形で B of A の形式が使われる許容度が大きくあ

がる (1996:261)。

一つの表現の中に相対立する特徴が同時に存在するとき、一方が必ず優先されることになるが、同様の例は生物にも見られる（「ハゲタカの頭はなぜハゲているのか」2009:172）。たとえばライチョウは厳寒期の高山、尾羽の下部と目の周りを除いて全身、純白に衣替える。熱効率から言えば、夏と冬の羽毛の色を逆さにすればよいのだろうが、きびしい自然の中では天敵から身を守ることが何よりも優先される。雪の上では白いほうが絶対的に生存に有利だからである。この例の場合、外的な要因、内的な要因という点で違ってはいるが、自分の体を守るという点においては共通しており、条件的には両方を満たしていたほうがよい。しかしどちらかを取らなければならない場合、一方を犠牲にせざるを得ない。¹⁾ カメレオンや昆虫を初めとする多くの生物がまわりの環境に合わせて色を変化させる保護色の性質を身につけているが、これが生存に大きな役割を担っていることから、この性質は何よりも優先される特徴なのであろう。

言語は絶えず時間の経過とともに変化するが、言語全体が一つの傾向に沿って進んでいるあり方とは対立してしまう、つまり逆方向のあり方が個々の構文に出てくると、結局は言語全体の傾向になびくことが、個別のあり方の用法を変化させ例外を生む要因となることはこれまでも見てきた。

生物の場合は個別の存在が全体に影響するという逆の作用を紹介した。たとえばクジラの祖先であるパキトゥケスが陸上から海へ進出していった例である。陸上で生活するという本来の生き方を捨てて生活環境すべてに影響するほどに一つの特徴が全体に及ぼしたのである。

英語という言語全体に浸透した end-weight が各構成部分のあり方に影響する例とは逆であるが対立する要因がある場合、一方が優先されるということは生物にも起こっているのである。

2 一つの形式に落ち着く理由

英語で、たとえば能動態、受動態という対照的（別の言い方をすれば相補的）な形式が存在しているのと同じように、英語の所有構文にも A's B、B of A あるいは AB というそれぞれ対照的な形式が存在する。どんな形式であろうと、違う形式が存在するのは、それぞれに存在する理由があるからである。言語にも経済性が働いている点を考慮すれば、必要のない形式は消えてしまっていると考えるのが普通なので、その点でも当然であろう。

したがって英語ではそれぞれの形式が他とは違う特徴を持ち、ある関係を表現する場合それぞれの形式の特徴に合うような内容の語が当てはめられることになるが、もしある事象を表現する場合、既存の形式のいずれの特徴にもそぐわない関係が出てきた場合はどうなるのであろうか。

限られた既存の形式で表現することがそぐわないとき、表現のあり方としてはおそらく次の二つに分かれるはずである。一つはその表現に限り、特殊な言い方が定着する場合である。たとえば This is John speaking ような文で、こういった例はいわゆる英語の 5 文型、つまり既存の文形式からははみ出してしまう。したがって多くは限られた特定の言い回しにのみ見られるものとなる。

そしてもう一つのあり方が、既存の形式で表される他の例との間に共通性は見い出せないが、その形式を借りて表現される場合である。以下に挙げる例がその一つとして認められるかどうかは議論の余地があるであろうが、このような例として捉えることが可能な一つとして述べておきたい。

天候、状況、時間を表現する場合、それらを指していると言われた it が主語に置かれてきた。本来英語は必ず主語を要求する言語である。日本語のように主語を表現しない方が普通（たとえば新幹線の

車内でのアナウンスで「まもなく京都です」というような類いの文）の文があるという言語ではない。したがって英語は何か主語となるものを立てないといけない。そこで it を立てる。それにより他の構文と同様の形式を取れているとも言えるわけである。

しかし認知言語学的な立場から、同じ構文で表される主語との間に共通する意味があるという考えに発展すれば、同じ文の形で表されるすべての主語との間に一つのスキーマが存在するというようになってしまう。そしてそういった例に一つの共通性を探ることになれば、あったとしてもかなり抽象的な特徴しか見い出せないことになるだろう。

ただ、形を借りるという点からこれを考えてみれば、主語に it を立てることによって SV(C) 等、既に使われている文の形に当てはめられるように構成することで文の形が代用されていると考えることも出来るのである。限られた状況における決まった言い回し、表現なので、既存の形式を借りることが言語の経済性の点からあり得ても決しておかしいことではない。

こう考えると it 等の漠然とした状況を指す表現が SV の構文を借りて表されるのと同様、日時を表す表現が所有構文の一つの形式を借りて表されていると解釈することも可能である。そしてこの考え方に沿うと所有構文で説明出来なかった日時を含めた二つの問題が解決する。つまり descriptive genitives や genitives of measure と呼ばれる用法である。

たとえば前者の a women's college という表現や、後者の例となる ten days' absence という表現は A's B の形式におけるスキーマを求めるにあたって例外として最初から除外されてきた (Taylor:1987b)。A が B を特定する機能を持たず、他の用法と異なっているからである。しかしこういった 2 つの表現が A's B の用法として存在することは、形式と意味との関係を崩す点では不都合であ

るが、形式が必ずしも意味との関係からだけでは成り立っていないこと、すなわち経済性などが常に言語に働いていることを考慮すれば、その要因の影響から存在していると考えられることのできるものである。

もちろんここで挙げた二つの用例でその要因の程度は違う。たとえば descriptive genitives の例は women という、人を意味する語が A に来ていることがこの形式を使う大きな要因になっているとも言えるからである。

しかし日時の表現や genitives of measure の表現の場合、たとえば today's newspaper、あるいは ten days' absence という表現と my book という表現の間には同じ A's B が使われていても、両者の間に見い出せる関連性はほとんどない。A's B という表現に見られる A と B の名詞間に存在する顕在性の差の程度も違えば A と B の間の意味関係も違う。むしろ today's newspaper の場合などは、顕在性の点から考えるとある見方からすると B の方が具体的に顕在性が高いとさえ言える。したがって以上で述べたような英語の他の例にも見られる用例等を考慮すると、無理やりスキーマを求めるよりも以上のような考え方をした方が自然なのである。

もし一つの理由づけをあえてするならば、次のようなことになろう。Today という日時を意味する語ともう一つの語をつなぐ、つまり二つの項の関係を表す表現形式には A's B、B of A、AB の 3 つがあり、いずれの可能性もあるのであるが、newspaper は today という語との関係から語られると B を特定する役割を果たすため、A's B の形式が持つ表現上の有効性が発揮される。だからこの表現形式が使われていると考えられるのである。

しかし genitives of measure の例は同じ日時に関連する表現ではあるが（ただしその意味合いは違っている）、A は人にも関係しないし、A が B を特定するという性質も持たないし、顕在性の差という点でも A's B の形式で表されることに何ら接点はな

い。この表現が例外とされるものの中でプロトタイプから一番遠い存在と言えるのである。それでも A、B という二つの項を表現する英語でのあり方は基本的に上で述べた 3 つのパターンしかなく、他の形式を新たに作り出して表現するよりもどれかの形式を使いおさめることが経済性の点からは有効なのである。

このように一つの形式には基本的に共通する性格を持った A と B の関係が表されるのが、英語の形式と意味の関係上自然であるし、大多数の用例がそうなのであるが、決してすべての例で接点があるわけではない。またそのように考えるほうが自然で無理がないように思われる。

生物界にもある種類に一つの共通する特徴が見られても、すべてが同じ理由でそうなのではない場合がある。その一つが鳥の頭に関する例である。鳥の中にはハゲワシとかハゲタカと呼ばれ、頭に羽毛のないものがある。こういった鳥は屍のやぶれ穴から体内へ首をつっこんで死肉を食う。したがって頭が血まみれになる奇怪な食事を合理化するために頭や頸がはげていると考えられている。しかしあるものは果実を食い、あるものは小動物を食う。したがって屍には関係がない。けれどもその食生活のどこかで頭部の羽毛を欠く理由があるのだろうと考えられている。トキの類にもハゲ頭の種類が多い。しかし泥っぽい湿地や干潟にいて、小動物をとって食う鳥なので、これも屍とは関係がない。その食性の中に何かがある、ハゲ頭の有利な何かの理由がある、と考えて然るべきだが、まだ説明はされていないという（「ハゲタカの頭はなぜハゲているのか」2009:200-203）。

したがって共通の特徴を持っているからと言ってすべてのものが同じ理由でそうなのではないのである。人間は涙を流すがウミガメも涙を流す。しかしウミガメが流す涙は海の塩分を出すためであって、人間が流す涙の理由とはまったく違って

いる。

同じ様相に外見上見えるものでもその理由は同じ原理でそうになっていると考えられるものと、まったく違う理由からなっており、たまたま同じように見えるだけの場合もあるのである。

同じ様相をしているものに共通性はないかと理由を見つけ出そうとする必要性はあるし、実際そこには何か共通のものが隠れているかも知れない。しかし決してそれに固執するのではなく、以上のような例から別の可能性を考えてみる必要性もあるのである。

3 代用

2で述べたのは、どの形式にも本来そぐわない関係がある場合に、既存の形で代用するという例を挙げた。1で見たのと同様、2の例も代用の一つである。つまり英語の所有構文の場合、意味と形式の間に一つの相関関係は成立していても、もう一方の相対立する形がもう一方を補うという性格も持っているし（全体的傾向が優先されたために別の形式（本来は対立する形）が使われる場合）これとは別に形式とそこに相応する表現とが合うとは限らないものまでも経済性の面から請け負うというあり方もあることを見た。一方がもう一方の代用となる例も当然意味と形式の間を破っているから広い意味でこの二つは共通している。どちらの場合も形式と意味との関係を捨てて一つのあり方が成立することが起こっているのである。

生物の場合も代用は起こる。それにはいくつかのパターンがあるが、たとえば我々人間の五感の場合で次のような例である。我々には触覚、臭覚、味覚、視覚、聴覚があり、これらでもって外界を捉え、自分たちの生存に必要なものとそうでないものを識別して取り入れている。こういった感覚を総動員して我々は一つの情報を得る。その場合、その場の状況

を把握するのにどの感覚が一番使われ、有効かは条件等によって違う。

ただ語弊を恐れずに言えば一般に視覚はある状況を把握するのに大きな役割を果たしている場合が多い。しかし、もし目が見えないという状況になった場合、臭覚がその役割を果たすことが出来る場合もあるようだ。たとえば街には臭いがあるから、目の見えない人にはそれで道に迷ったかどうかかわかるという（2002:175）

あることが別のものの代用となる例はこういった場合に限らず、手話が発達したのも同じである。もともと言語は手を使ったジェスチャーの中から生まれたとする説がずいぶん昔からあるが（「言語は身振りから進化した」2008:255）、もしこの説が正しければ言葉が使えないから手話を使うのは元来のコミュニケーションに逆戻りしたパターンと言える。ジェスチャーと言語の間関係がいかなるものであるかははっきりと述べることはできないが、我々が日常会話で話をする場合を考えても、この二つが密接に関係していることはわかるはずである。

以前も指摘したが言葉には複数の言い方がある。ほぼ同じ意味を表すといっても違った語が存在する以上、意味に、少なくとも文体的な点において違いがある。一方である語の意味がわからないときには、言い換えとしてそれに近い言葉を言うことによって意味を伝える。すなわち語の場合、言葉が違っていてもその存在理由を持ちながら代用を行うことは日常会話ではしばしば見られることなのである。辞書の定義はまさに代用の一つでもある。

こういった言葉の代用がある以上、形式の代用があっても決しておかしくはない。むしろ自然なことと言えるのではないか。また代用はその言葉の裏に潜んでいる意味の通り、ぴったりとした言葉ではない。一番適している言い方ではないということである。代用する語と本来使われるべき主語との間には何らかの意味のズレがあるのは当然である。代用の

際はもとの意味に近いというだけである。

形式が代用される場合も同様である。そこにはぴったり当てはまる表現が来ているわけではない。したがってそういった例をも含めてそこにくるすべての例に当てはまるスキーマを求めること自体問題があるのではないか。こういった点は従来の言語分析における一つの落とし穴といえるのではないかとと思われる。

4 棲み分け

しかし一言付け加えておきたいが英語における意味と形式の結びつきを否定しているわけではない。両者にはしっかりとした対応関係が間違いなくある程度存在しておりそれぞれの形式がそれぞれの役割を果たしている。この章ではその役割の違い、そしてそれを生物というものとの関連から考えてみたい。

平見(2004:15)で所有構文の A's B と B of A が全く違った対照的な性質を持っていることを指摘した。一つは A's B は B が必ず head noun となり B に動詞の人称の一致が行われる。しかし B of A には B が head noun になる場合と A が head noun になる場合がある。また A's B には A が人、それも第一人称、第二人称、そして動物というふうに A に生物が来ることでこの形式で表現される内容が左右される(多くの場合容認度が決まる)が、B of A の A には人であろうと無生物であろうとその点においては容認度に差が出てこない例が多数あることも指摘した。A と B の顕在性の差、A と B との意味関係、そして head noun の固定化という点に関して、この二つの形式はそれぞれ全く対照的な性格を有しているのである。これはそれぞれの形式がその存在理由を確立するためには必要なことで、自然に異なる性質を持つ方向に進んでいったと考えられる。もし同一の性格を有する方向に進んだとしたら、おそらくは一方が淘汰され一つの表現に統一されて

いるからである。日本語に英語と同様の形式が生まれなかったのは、日本語の傾向として形式と意味の相関関係が言語全体に発達しなかったことであろう。

ところで生物の場合もこれに相当するような出来事が起こっている。前回取り上げた例はガラパゴス諸島で各地に反映したフィンチという鳥である。これらは同じ鳥が島々で環境の影響を受けて14種類に変化していったものと考えられている。それらの鳥は亜種と呼ばれそれぞれが種として確立するまでには至っていない。14種類の中で交雑が起きて生まれた雑種も定着していることがわかっている(「謎のいきものファイル」2009:194-195)。

フィンチのように場所が大きく影響する例は、言語の方言の場合と同様と言える。居住地域ごとに独特の方言があるのはどの言語でも同じである。これらは音響的なパターンが学習性であることを示している(「言語は身振りから進化した」2008:47)と言えるが、まさしく環境が後天的に影響している例である。

これとは逆に同じ場所を生活範囲としている生物が別のあり方でそれぞれ自分たちの生活圏を確保している例がある。繁殖期をずらす例もあれば、餌に関する例もある。

京都の賀茂川に生息するヒラタカゲロウは川の流れの速さに応じて棲んでいる場所を変え、それぞれの領域を確保している。またトンボの一種であるギンヤンマとクロスジギンヤンマの幼虫は羽化する時期をずらし両者が争いを起こすことなく棲み分けている(「謎のいきものファイル」2009:102-105)。

また餌に反映されている例として、たとえばアゲハチョウの種は餌として食べるものが違っている。たとえばアゲハチョウはミカンとサンショウの葉しか食べず、別種のキアゲハチョウが食べるパセリは受け付けない。飢え死にしてでも決まったものしか食べないという(「生物多様性読本」2009:11)。地球上に多くの生物が互いに繁栄して多様性を保つ。

その最も重要な原理はそれぞれの生物が基本的に自分の分を守って生きることである。

こういった棲み分けが言語にも生物にも同様に見られる。いずれもそれぞれの種、あるいは英語の場合なら、形式が生き残るためにその特殊性を持ちその特徴を維持しようとするのは当然である。

しかし重要なことは意味と形式が重んじられる言語であっても、それは言語のある一面だという点である。この点だけに縛られて言語を研究しては、他の例に見られるような別の側面を見逃してしまうことになる。

5 語と文法

この世の中は地域によってさまざまな文化が開き、違いがある。西洋と東洋の宗教の一つの根本的な違いは西洋がキリスト教、ユダヤ教をはじめ一神教が普通なのに対し、日本を含めて東洋は多神教であるという点である。松岡正剛氏によれば²⁾ 西洋で文化が栄えた土地は砂漠であったという。彼らにとってその地点からどちらの方向に進むかということは生死を分ける大きな選択であった。したがってその選択に間違いが起こらないよう絶対的な指導者が必要であった。それは神に相当する絶対的な権威者でなければならない。一方、東洋は森林が基本で東西南北どちらに進もうとさまざまな種類の危険性があった。したがってどちらに進んでもそれを守ってくれる神が必要であった。ある時は山の神かも知れないし、ある時は水の神かも知れない。そういった状況の違いから一神教、多神教の違いが起こったのではないかという。

現在我々が住んでいるそれぞれの生活の場においても、同様に、環境の違いがあり、食物やファッション等国によってたくさんの違いがあり、そういったことの複合が文化の違いとなっている。

音声と意味の結びつきは恣意的である。したがっ

てある概念を表す言葉は言語が3000語あるとすれば、文化的な面で交流があれば同属語において重なる場合もあろうが、基本的にはそれに近いだけの表現が存在することになる。これと同様、文法もおそらくその言語その言語で大なり小なり違って当然である。もし文法がこの恣意性を持ち合わせていなければすべての言語で語だけを入れ替えれば簡単に言葉が通じてしまうことになる。しかし生物が環境に応じてさまざまな形態をとって進化したように文法も当然語の性質等によって文法体系も影響を受けるだろう。しかもその変化には選択肢がある。

生物は大半が他の生物とは交配出来ない。固有の種を残そうという働きがあるからである。この点でも言語に生物と同様の性格があるのは、一つの体系を崩さずに存在する性質を持つことが必要だからであろう。もちろん言語によって影響の度合いには差がある。フランス語などは外来語の影響を受けにくい。日本語や英語のような外国文化との接触によって導入される借用語が多い言語とは対照的である。

フィンチがそれぞれ種類が分かれていったといっても、まだ亜種という段階に留まっているために交雑が起こる。しかしもっと別々の方向に進んでいけば、おそらくは交雑が起こりえない状況が生まれるだろう。

言語も同様にドイツ語、英語は違う言語として確立しているが、同じゲルマン語である。生物同士で交雑できなくてもネコ科、イヌ科というように同じ起源から分化した生物は多い。こういった例を考えると、それぞれの言語が独自の文法を構築していくのは当然のことである。似ている言語、つまり同族言語であっても一旦枝分かれし、一つの言語として確立してしまえば、コミュニケーションに支障が出るのは生物と同様の原理が働いているからだと思われる。言語もそれぞれ言語固有の方向性ができ、変化していくのであろう。英語という言語の中で形式がそれぞれの存在理由を持つために相対立する形式

とは別の特徴を持っていくように、言語それ自体も基本的には枝分かれした時点で他の言語とは別の性格を帯びていくのである。

この点でも言語と生物には多くの共通の性質が見られるのである。

まとめ

以上で説明したことを概観すると言語が多様でさまざまな種類があるのは自然なことのようと思われる。音声と意味の結びつきが恣意的であれば、言語が誕生する際に、さまざまな側面で（たとえば文法のあり方において）恣意性がある程度反映されてしまうのは当然である。またそれぞれ独自に言語が構成されていった場合、各言語が特有の世界を維持するために文法が他と違っている方がよい。人類が白人、黒人、黄色人種と分化したのは環境における違いが影響しているようだが、それは紫外線等に対する体の適応力からである。言語も語の性質や環境（文化）における違いが言語の特徴に少なからず影響し文法等が構成されていったものと考えられる。

生物も陸上、海の中という違った環境では発達の仕方とも自然と異なる方向に進む。同じ陸上でも、生物はそれぞれが最も有利に存在できるあり方を独自に発達させて環境に対応していくことになる。砂漠にはいくつもの生物が棲んでいるが、その生き残りの方法はそれぞれ違っている。オリックスという砂漠に棲む動物は水なしでも生きていけるといふ。それは砂漠に生きる生き物の中でオリックスだけが進化させた生き残りの方法を体内で作り出したからである。

犬の言語にも人間の言葉だけに見られる特徴のあることは以前紹介したが、それでも人間の言語の性質は他の動物のものとは異なっている。そういったそれぞれの種だけが持っている特徴を特有のものと言うなら人間の言語も人間だけに備わった性質であ

ろう。

特有の性質を生物が独自に身につけていくように各言語も独自に文法を発達させていけば、それらの間に共通性を見つけ出すことには無理があるように思われる。一つの暗号を人間が考えだし、それとはまったく別の暗号を作り出した場合、その暗号の成り立ちが違っていればその二つに共通性を見つけ出すことが難しいのに似ている。また仮に見つけた所でそれは相当抽象的なものになるはずである。それらの暗号を解読するためには、それぞれに別の解読方法を見つける以外にない。しかもそれぞれの暗号の取り決めが違えば違えばほど共通性は見い出せないことになる。

生物がそれぞれその種のみに見られる特徴を発達させ、他の生物にはない独自性から生存を確保してきたのなら、それぞれの言語もそれに似た側面を持っていると言える。人類が動物のように肉体的な面での強さの進化をしてきたわけでないことを考えると、知能の面でそれを補わなければならない。（逆に知能が発達したから肉体的な側面が進化しなかったのかも知れない。）そしてその知力を伝えることが生存に絶対的な使命であるならば、言語は人間の生存に不可欠な手段として発達したものと言える。そういった解釈で言えば先ほども述べたように言語は人間だけが持つ特有のものだということ出来るだろう。

生物はさまざまな可能性をかかえて進化している。とは言っても最初に述べたように生きている環境から必然的にその制限はある。言語における変化のあり方は多様だが、その変化には必ずある種の傾向が現れる。それは生物が変化する場合一つの方向に全体が進んでいくのに似ている。クジラの祖先が海に進出していった例は極端な例であるがその一つである。

人間あるいは生物が環境への対応から体の変化をどこかの時点で生じ、進化させると考えるなら、そ

の変化が全体の変化へつながる影響が見えて当然である。しかし全体が変化するまではその小さな変化はその時点では例外として扱われるだろう。

経済性が常に働き、それが生物、言語ともに変化に重要な要因になっていると考えるなら例外はいつの段階でも存在するだろうし、それは次の言語への変化のステップにもなるだろう。同じ言語でも100年、200年たてば解読できないことが生じるのもまさにそういった特徴があるからである。

脳が変化への責を負うのであれば、個別の言語における経済性にそくして変化していく能力を持って

いると言える。言語ではないが同じ指を使うという動作でも、その対象となる作業が違えば当然その動かし方には違いがある。ピアノを弾く場合と針仕事の作業をする場合の、その動作には共通する部分もあるかも知れないが基本的にはまったく別のものであろう³⁾。言語もそれぞれ違う構成をしているのだから、独特の文法を構築する場合はその特徴に沿った変化に流れていくに違いない。

言語それぞれにある例外は常に言語の経済性と言語の全体の動向に左右されていると思われる。

注

1) ノウサギが冬に毛が白くなるとなせ都合がよいかと同書(2009:184-187)に書かれてあるが、ここでは雪との保護色以外の理由も記されている。獣の毛は根元では皮膚からほぼ直角に生えていて外からの光線は毛が白くと乱反射して皮膚まで到達する率が高くなる。反対に毛の色が濃ければ、何回か乱反射している間に光線は毛に吸収されて皮膚まで届きにくくなる。太陽の紫外線は強すぎても害になるが、不足すれば骨をつくるときに必要なビタミンDが欠乏してクル病を引き起こしたり骨が折れやすくなったりする。乏しい紫外線をいかにして有効に皮膚に吸収するかは動物たちにとっても大切な健康問題であり、ノウサギの場合は単なる保護色だけの働きをしているのではない。これがライチョウにも当てはまるかどうかはわからないが、白い色になっているのはたった一つの理由だけではない可能性はないかも知れない。

2) イサムノグチ記念館10周年の講演会(2009年11月17日午後4時よりかがわ国際会議場での講演)で松岡正剛氏が講演を行ったときの内容である。出典は明らかにされなかったことと、講演で独自の考えを述べていたことから松岡氏の主張と思われるが定かではない。

3) これに関しては次号で考察する予定である。(立花隆「脳とビッグバン」朝日文庫、2004)

参考文献

- 中原英巨 佐川峻 2008, 生物の謎と進化論を楽しむ本 PHP 研究所
 日本博識研究所 2009, 謎の生きものファイル 宝島社
 マイケルコーバリス 2008, 言葉は身振りから進化した 勁草書房
 上野正彦 2002, 解剖学はおもしろい 青春出版社
 2009, ハゲタカの頭はなぜハゲているのか 講談社 + a 文庫
 2009, 日経エコロジー生物多様性読本 日経 BP 社
 Taylor, John R. (1989b), "Possessive Genitives in English", *Linguistics* 27, 663-686.
 Taylor, John R. (1996), *Possessive in English*, Oxford University Press, Oxford.